

近世文人文芸の研究

徳田 武

A Study on Classic-Chinese Style Poets in  
the Edo Era

Takeshi TOKUDA

表記の課題のもと、94年度は、次の研究を発表した。

1. 「詩人広瀬旭莊伝」 7 『江戸文学』第12号。  
1994年7月発行。  
文政8年7月から9年6月までの広瀬旭莊の動向を詳述し、特に「旭莊」という雅号を命名する事情を追求した。
2. 「詩人広瀬旭莊伝」 8 『江戸文学』第13号。  
1994年11月発行。  
文政9年7月から10年4月までの旭莊の消息を詳述。特に未刊の新資料『東遊稿』を紹介した。
3. 「菅茶山における「老い」の意識とその詩化」  
『日本の美学』第22号。1994年11月発行。  
茶山詩に見られる老いの自覚の型を分析したもの。
4. 「田能村竹田『風竹簾前読』の成立とその水準」  
『明治大学人文科学研究所紀要』第36冊。1994年12月発行。  
竹田が唐の蔣防の「霍小玉伝」に批評を施して

『風竹簾前読』と題して刊行した事情を述べ、その批評の水準を唐代小説批評史の内に位置づけたもの。

5. 「未紹介広瀬旭荘詩文解説」2 『明治大学教養論集』279号。1994年3月刊行。

前号に引続き、未刊の旭荘の自筆草稿に拠り、文政6年の詩を紹介、読解した。

6. 「都賀庭鐘とその中国学－『康熙字典琢屑』の検討－」 『秋成とその時代』(1994年11月、勉強社刊) 所収。

庭鐘は我国で初めて『康熙字典』を翻刻したばかりでなく、「琢屑」を付して、『辞典』の引用文の誤りを正したり、字義・字音の説明の不備を補正したりした。それは清の王引之らの『字典考証』が単に引用文の誤りの訂正のみを行っているのに対して、文字学の学殖を活かした、より積極的な校正であった。音と意義に就いて新しく説明を増補したとは、自己の字説の開陳ともいうことができる。さような字説の中には、『字典』の誤りどころか、現代の『大漢和辞典』の欠と誤りを補正するのに適用できるものも存している。最新の『漢語大詞典』『漢語大字典』の水準に比肩し得ているものも存する。そのような意味において、庭鐘の字説は現代の文字学者が参照すべき価値を備えているということを論述したものである。